

徐福王国相模

古代秘史・秦氏の
刻む歴史



【著】
前田豊
Yutaka Maeda

丹沢山系・大山周辺に秘められた
豊富な「徐福伝説」……

秦氏・
波多野氏の刻む
日本人のルーツに迫る！

彩流社



9784779115509



1920021020001

ISBN978-4-7791-1550-9
C0021 ¥2000E

彩流社

定価(本体2,000円+税)

徐福王国相模
古代秘史・秦氏の
刻む歴史

「大山」の山岳信仰に関連して、山梨県の道志村に残る伝説で、秦の徐福が蓬莱山なる富士に不老不死の仙薬があると聞き及び、五百人の童男童女を使わして求めたけれども得ること難く、たとえ幾年ついやそうともこの秘薬を手に入れぬ内は、帰国を許さずと厳命した。やむなく五百人の使者は土着して、相州大山までの連山を訪ね探して秦野に移住し、御正体山・地蔵ヶ岳・薬師ヶ岳・丹沢山から大山を、神仏に祈り探して、この地を蓬莱山と呼んだ。しかしめざす仙薬は遂に見当たらず、五百人の男女はここに帰化してしまった。」——●神奈川県伊勢原町勢誌より

まえがき

本書は、弥生時代の日本列島に渡来した徐福一行に由来する、新たな国づくりの拠点を発見したことに基づく古代秘史謎解きの第二弾である。筆者が愛知県の東部・東三河の「古代神都」発見に次いで、見出した相模の古代秘史は、秦氏の謎を解明するものである。

私が日本の古代秘史に関心をもって、『古代神都・東三河』という書を、彩流社から上梓してから、既に一五年近く経つ。かつて、この書を読まれた関東在住の読者から、相模（神奈川県）の大山も不思議な歴史を秘めているようなので、解明してみてはどうかという提案を受けた。

その時期、私は、東京練馬に住んでいたが、晴れて空気のきれいな日には、自宅の窓から富士山と相模の大山を眺めることができたので、そのようなことがいつか可能になるだろうかと考える日もあった。その後、様々な要因がからまって、導かれるように神奈川県秦野市鶴巻に住むようになった、ここからも、美しいピラミッド型の富士山と大山が眺めることができた。

そこで、相模の古代史を調べてみると、この地特有の歴史が見いだせただけでなく、東三河との類似性に目を見張ることになった。相模には弥生時代に、東三河から入植があったと思われる発掘物が相模川流域や綾瀬に出土していることが判明した。その中で最も大きな特徴は徐福伝承の豊富なことであった。

私の秦野史研究に際して、最も大きな影響を受けたのは、岩田達治氏（秦野市本町小学校元校長）である。氏は秦野の民話を取りまとめて、書物（『丹沢山麓秦野の伝説』など）として残されていた。

また、秦野ぶらり会会長の石川邦夫氏も相模の方位線を発見するなど、ユニークな研究と豊富な知識を待ち、多くの情報をもたらして下さった。秦野市は、市史編纂室の活動結果を膨大な資料として公表し個人頒布も行われていたので、活用することができたのは幸いだった。

神奈川県には、歴史研究好きの方は多い。神奈川歴史研究会や神奈川徐福研究会があり、様々な範囲の歴史研究結果を聞くことができた。自らも調査結果を報告するうちに、集まった情報を取りまとめて、「相模の古代秘史と日本人の関係」を解明しようと考えようになった。

日本人のルーツについて、中心となるものは、相模の「徐福一行の子孫」、即ち、秦氏の刻む歴史である。東三河の古代史解明で発見した徐福伝説の発展が、相模に多数見つかったのである。

とりわけ、司馬遷が著わした『史記』に、「徐福は平原広沢を得て、王として止まり来えず」とあり、その「徐福王国」が相模にあったと、考えるようになった。

本書は、これらの調査結果を総まとめして報告するものである。秦野では、秦氏は波多野氏となって、源氏と強いつながり関係を持つことが判明した。波多野氏は日本全国展開によって、日本各地に秦氏の影響を広げたと思われるが、中でも大きな影響を与えたのは、神道、仏教、キリスト教などの精神面や宗教関係である。さらに、南朝天皇との繋がりも見逃せない。

相模には、大山山麓の古代文字を含む「目形石」から発展して、古代イスラエルのヨゼフの墓伝承など、目を見張る不思議が隠されている。徐福との関係を示す「金印」が発見された富士山麓の富士王朝とのつながりは、邪馬台国時代の狗奴国の拠点であった可能性をも考えさせる。

これらの存在の意味を、日本人のルーツに係る「古代秘史」として解明を試み、読者のご批判を仰ぐ次第である。

第一篇 徐福王国相模

1 章 神奈川（相模）における徐福伝承

- 一．はじめに 18
- 2．徐福伝説とは 19
- 3．神奈川の徐福伝承 20
- 4．秦野の徐福伝承 26
- 5．富士山麓と秦野の徐福伝承のつながり 30
- 6．秦野市蓑毛の大日堂の秦野由来碑 34
- 7．神奈川県北部の徐福伝承 40
- 8．相州犬山 42
- 9．相模の一宮・寒川神社のご祭神も徐福か 50
- 10 その他神奈川県内の徐福関連の地名等 55
- H．からこ神社とクルソン仏 57
- 12 クルソン仏の諸形態 60

第2章 徐福伝承を伝える人々

- 1．相模の徐福伝承をつなぐ筋道 65
- 2．禅僧・無学根元と徐福 66
- 3．秦野宝蓮寺と徐福および無学根元の関係 68
- 4．日本の徐福情報を中国に伝えた弘順大師賜紫寛補 70
- 5．弘順大師賜紫寛補は真言密教ルートで徐福の情報を得たか 71
- 6．富士山来館の道志川の伝承は犬山が徐福一行の開発であることを証言していた 72
- 7．日本における徐福伝承の流れ 73

第3章 日本古代史における徐福の存在の重要性

- 1．『富士古文書』（『宮下文書』）、徐福文献に関する見直しの必要性
- 2．『富士古文書』の由来 82
- 3．『富士古文書』の内容 83
- 4．『富士古文書』の再評価 84
- 5．徐福に関するその他の情報 85
- 6．『史記』の別の個所「淮南所出列伝」の異説 86
- 7．日本神話の神々と徐福 86
- 8．まとめ 92

第二篇 相模の古代

第4章 相模国と東大寺別当良弁僧正

- 1．はじめに 96
- 2．古代の相模国 97

3. 相模国の国府 99
4. 奈良時代の相模国守 102
5. 相模国と奈良朝廷との関係 105
6. 漆部伊波関連情報 匹
7. 良弁の登場 108
8. 大山寺と良弁 112
9. 良弁と蓑毛大日堂五大尊（秦氏）の関係 115
10. 長弁と東大寺に関する諸説 116
11. 相模の方位線と弥勒の里 121
12. 相模は神社と仏寺の国 124
13. まとめ 132

第三篇 秦氏の都・秦野

第5章 秦野地方の略史

1. 古代秦野 136
2. 古墳時代の秦野 137
3. 秦野と秦氏 138
4. 波多野氏の出自 139
5. 秦氏と徐福 140
6. 秦野盆地に存在する史跡 141
7. 波多野氏の出自と展開 142
8. 波多野氏の系譜 143
9. 波多野義通の活躍 145
10. 波多野氏の分派 147
11. 東国の武家政治の幕開けと波多野氏 148
12. 鎌倉幕府の成立と承久の乱 149
13. 承久の乱と波多野氏 152

第6章 秦野と波多野氏の興亡

1. はじめに 155
2. 実朝の暗殺 156
3. 実朝の御首の行方 157
4. 秦野と波多野忠綱 157
5. 実朝の御首塚が秦野田原に存在する背景 159
6. 実朝殺害の黒幕 162
7. 鎌倉時代の波多野氏 148
8. 波多野氏と源氏、坊門姫 164
9. その後の波多野氏 166

10. 波多野氏の後裔 168

第7章 相模の地名の由来と伝説

1. 相模の地名、由来 174
2. 秦野の地名 175
3. 鶴巻地区の地名の由来 177
4. 大根の地名由来 183
5. 平将門伝説による地名 186

第四篇 古代イスラエル人の目指した蓬莱国

第8章 大山に関する情報

1. 丹沢山系は蓬莱と呼ばれていた 190
2. 丹沢の歴史 197
3. 丹沢の修験者伝承 200
4. 富士東麓の徐福伝承 203

第9章 大山とヨセフ伝説の国

1. 秦野と旧約聖書の民・徐福一行 205
2. 大避神社と秦氏、聖徳太子 206
3. 大山祇命は、秦氏が祀る 209
4. 秦野と隠れキリシタン 210

第五篇 日本人のルーツ

第10章 イワクラに関する秦氏視点からの考察 218

1. 吉備のハタ氏の磐座に関する佐藤光範氏の研究結果 217
2. 久慈力氏の「巨石文化ミステリー」に関する新説 218
3. イワクラ信仰に関する徐福と秦氏の役割 220
4. まとめ 227

第11章 日本の超古代を語る「古史古伝」の真相

1. はじめに 229
2. 徐福集団の日本列島での広がり 230
3. 日本の「古史古伝」と徐福をつなぐ秦氏 231
4. 日本の「古史古伝」に共通するもの 232
5. 各「古史古伝」の由来 233
6. まとめ 238

参考文献 245

あとがき 255

あとがき

筆者は、約15年前に、日本列島の中央に位置する愛知県東三河地区に住んでいた。

そのとき、日本の古代史認識が、従来記紀で言われていたような畿内から西域中心のものだけではなく、東海・関東が重要な役割を果たしているという、より広域な日本史に変わらなければならないと強く感じていた。

しかも、相模の古代史も東三河と弥生時代から大きな交流があったことが判明した。共通するところは、徐福伝承と秦氏である。

富士山麓の宮下家に保管されている『富士古文献』（『宮下文書』）は、古代日本列島の悠久の歴史をつづるものである。その歴史は、相模と一体で展開していた。この書物は『徐福文献』とも呼ばれる。富士山麓山中湖湖畔から出土した金印は、「魏誌」倭人伝に記された卑弥呼の時代の中国「呉」の將軍の持物だったと推定される。邪馬台国と「狗奴国」の戦いは、「魏」と「呉」の代理戦争だったと見ることができ、富士王朝は、「呉」車の拠点であったと考えられる。つまり、相模は狗奴国の根拠地であったと考えられるのである。

ところで、本書をまとめる動機を与えたのは、マヤ歴で訪れる歴史の終わりや、聖書で取り上げられる世の終わり、スピリチュアル系の世界で話題になっている、2012年12月に起きると言われる「アセンション」の現象に、この書が少しでも、影響を及ぼせるかも知れないと思ったからである。

それというのも、相模の大山は、東大寺建立の発起人かつ初代東大寺僧正となった僧「良弁」が、ミロクの兜率天を再現しようとして開発し、大山寺の49草堂を建てようとしたと言われるからである。

「ひふみ神示」では、ミロクの世は、半霊半物質の次元上昇した世界として語られているが、2012年とは言わず、750年ごろに地上にミロクの世界を築こうとした精神を見直すことは有意義と思われるからである。結局このときは、聖武天皇の勅命で、日本全国に国分寺を建てることになった。同様に、相模にも多くの寺院や仏像がもたらされたようである。

大山寺の三代目住職が、日本の真言密教の祖である弘法大師・空海であるというのも、不思議な巡り合わせである。空海は、水脈、鉱脈を発見する山師的素養をもち、役小角の山岳修験の場をたどって、仏教的修行活動を行っていたと思われる。

徐福伝承は、彼らによって引き継がれと思われる。富士山麓東部の道志川流域や、丹沢山系では現代まで徐福の子孫としての情報を引き継いでいたのである。それが、藤沢妙善寺の福岡家の墓碑に記載されていたことは、幸運であった。

『富士古文献』によれば、延暦19年（800）の富士山大噴火の前には、徐福一行の子孫は、福地山高天原近郷の三分を占め、東北、奥羽までは二分を占めたと記録している。富士山北麓から相模にかけては、住民の三割が徐福一行の子孫となっていたことが考えられる。

これにより、徐福伝承と日本人のルーツが解明される1つのとっかかりとなる。また日本の歴史は天皇の歴史でもあったが、天皇家の裏には、南朝天皇家があり、その裏には秦氏が存在するといわれる。

本書の最終章で述べた、秦氏の視点から見るイワクラ、および「古史古伝」に関する考察は、日本人のルーツに対する筆者の見解を述べたものである。邪馬台国論争を超える古代の謎解明に少しでも役立てれば、幸甚に思う次第である。

最後に、本書の出版に、快く応じて下さいました、彩流社の竹内社長様に、厚く御礼申し上げます。

2010年5月

著者識